ボール運動系領域ゴール型における児童が感じる面白さの特徴

福田瑠奏（宇都宮大学）

１．目的

本研究の目的は，小学校体育のボール運動系領域ゴール型における，児童が感じる面白さの学年による特徴を明らかにすることである．

２．研究方法

本研究は，児童のゴール型の授業感想からボール運動系領域ゴール型で感じる面白さについての分析及び調査項目の作成(研究①)と児童がゴール型で感じる面白さについての質問紙調査(研究②)から成る．

１）対象者：研究①は，小学校第 3 学年(1 学級 34 名)と第 6 学年(1 学級 33 名)．研究②は，複数校の第 3 学年から第 6 学年の 640 名．

２）分析方法：研究①は，質的統合法（KJ 法；山浦，2012）を用いて分析を行った．研究②は，ボール運動系領域ゴール型で児童が感じる面白さについて，質問紙調査を実施し，結果から探索的因子分析を行い因子構造を検討した．

３．結果と考察

１）ゴール型で感じる面白さの検討（研究①）

質的統合法による分析の結果，119 枚のラベルが作成され，それらは〈する〉〈関わる〉〈知る〉〈見る〉の 4 つのグループに分けられ，〈する〉においては，さらに『パス』『守備』『攻撃』『判断』『作戦』『仲間との連携』の 6 つのカテゴリーに分類された(図 1)．児童は，ボール運動系領域ゴール型において，多様な面白さを見出していることがわかった．その中でも，〈する〉に関しての記述は多く見られた．ゴール型は，得点を決めるまでにボール操作とボールを持たないときの様々な動きが必要になる．そのため，〈する〉の中でもいくつかの動作のカテゴリーが現れたことが考えられる．研究①では 29 問の質問項目が生成された．

２）ゴール型で感じる面白さの構造と特徴(研究②)

質問紙調査の結果から，探索的因子分析を実施したところ，【体験する面白さ】【他者から学ぶ面白さ】の 2 因子が抽出された．その後，多重比較を行い，学年によるゴール型で感じる【体験する面白さ】【他者から学ぶ面白さ】の比較を行った．その結果，両因子において 3 年生は他の学年と比べゴール型の多様な面白さを感じにくいことが推測された．

さらに，質問項目ごとに多重比較を行った結果，3 年生は特に相手を意識しながらのプレーや点を取るためにボール操作の判断をしていくこと，他のチームのプレーを見たり作戦を考えたりすることについて，他の学年に比べ面白さを認知しにくいことが明らかになった．それらの要因として，3 年生は 3 つの型で構成されたボール運動系領域の単元を初めて体験する学年であり，その型の運動を楽しむ上で必要な技術やルールの習得が十分ではなく，面白さを感じにくいのではないかと考えられる．特に，【他者から学ぶ面白さ】については，研究①においても，3 年生の感想は 6 年生に比べ，〈見る〉に関する記述が少なく，自分が体験する面白さ中心に認知していると推測される．

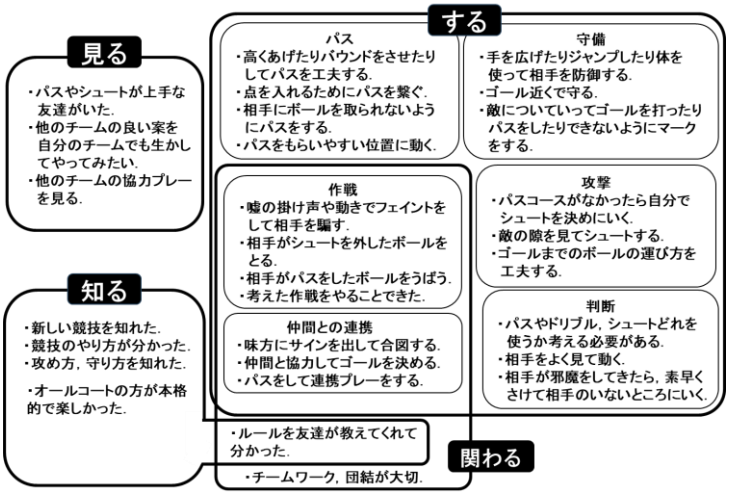

図 1 ボール運動系領域ゴール型で児童が感じる面白さ（グループ別）

４．結論

本研究の結果，ボール運動系領域ゴール型の面白さには，【体験する面白さ】【他者から学ぶ面白さ】があることが確認され，特に 3 年生は，他の学年に比べ多様な面白さを認知しにくい傾向があることが示唆された．そのため，小学校では面白さの適時性などを考慮しながら系統性を意識した授業が必要であると考える．